

登米圏域会議

【日時】令和5年11月1日（水）午前10時から正午まで

【場所】県登米合同庁舎5階501会議室

意見交換テーマ 「登米圏域における体験型観光の拡充に向けた取組と他業種との連携」（圏域独自）

【委員からの主な意見】

- ① 体験型観光は、農業関係のほかに、森林セラピーや北上川の舟下りなど、様々な体験ができるポテンシャルを持っているが、表に出ていない。いかにビジネスに繋げていくかということが課題となる。また、地域を周遊していただくほか、隣接する地域との連携を模索していくことが必要。
- 教育旅行で受け入れる生徒には、観光ではない、本当の農業を体験していただいている。受け入れる人数が多くなると、南三陸町と協力する場面があり、料金設定の違いや物価高騰による料金上げが課題。また、受入の多くは、一般の農家であり、安心安全を提供するための講習会開催などバックアップが必要。
- 長沼の持つ地域資源をいかに活かし、力をいれていくメニューをどう選択するか、また、二次交通など交通インフラが課題。
- JR東日本としては、地域との関わりを重視し、きっかけづくりのため、地域の魅力発信に力を入れている。着地型ツアーは、DMOやDMCが設計し、販売するのが主流。
- 体験モノは、従事者の高齢化による人材確保と人件費等の経費に見合った売上げの確保が課題。大きな観光地では、観光客が戻っているとのことだが、登米市は、その水準までには至っていない印象がある。
- 情報発信に努めているが、これ以上、何を発信したらいいのか、果たして、情報発信が観光に結びついているのか悩んでいる。必要な方に必要な情報発信ができる仕組みが大切。
- 伊豆沼・内沼は、ラムサール条約湿地であり、その条約の基本理念の中に、「ワイズユース（賢明な利用）」がある。世界にも誇れる自然環境であり、渡り鳥をテーマに「ねぐら入り」や「飛び立ち」等をテーマにプログラムを提案していくことが必要。
- 伊豆沼のハスマつりの運航者が高齢となり、存続が危ぶまれる状況。体験型観光を続けていくには、適正な体験料の徴収や協力していただいた方々への還元の仕事づくりが大切。
- インバウンドの観点からすると、登米市のコンテンツは、ベジタリアンやビーガンの方が多いヨーロッパ圏の方々向け。
- 登米市は、魅力的な資源がたくさんあるが、市民は、その魅力・財産をあまり理解していない印象。また、登米市ですべて完結することは難しく、気仙沼市などの他の地域との経済循環といった取組が大事。
- 道の駅米山は、登米市の入り口と自負。地元出身の丸山権太左衛門の銅像があり、その脇には土俵がある。登米市の子どもたちの相撲大会や高校と連携した高校生の相撲大会のほか、今年は東北6県の高校の選手権大会の会場となり、昨年度からは時津風部屋大会を開催している。
- インバウンドを考える際には、ターゲットをアジア圏におくのか、ヨーロッパ圏におくのかで変わってくるので注意が必要で、二次交通に関してもその視点は大切。また、情報発信は、県、登米市や観光物産協会それぞれでやっているが、相互にリンクするなど連携が必要。